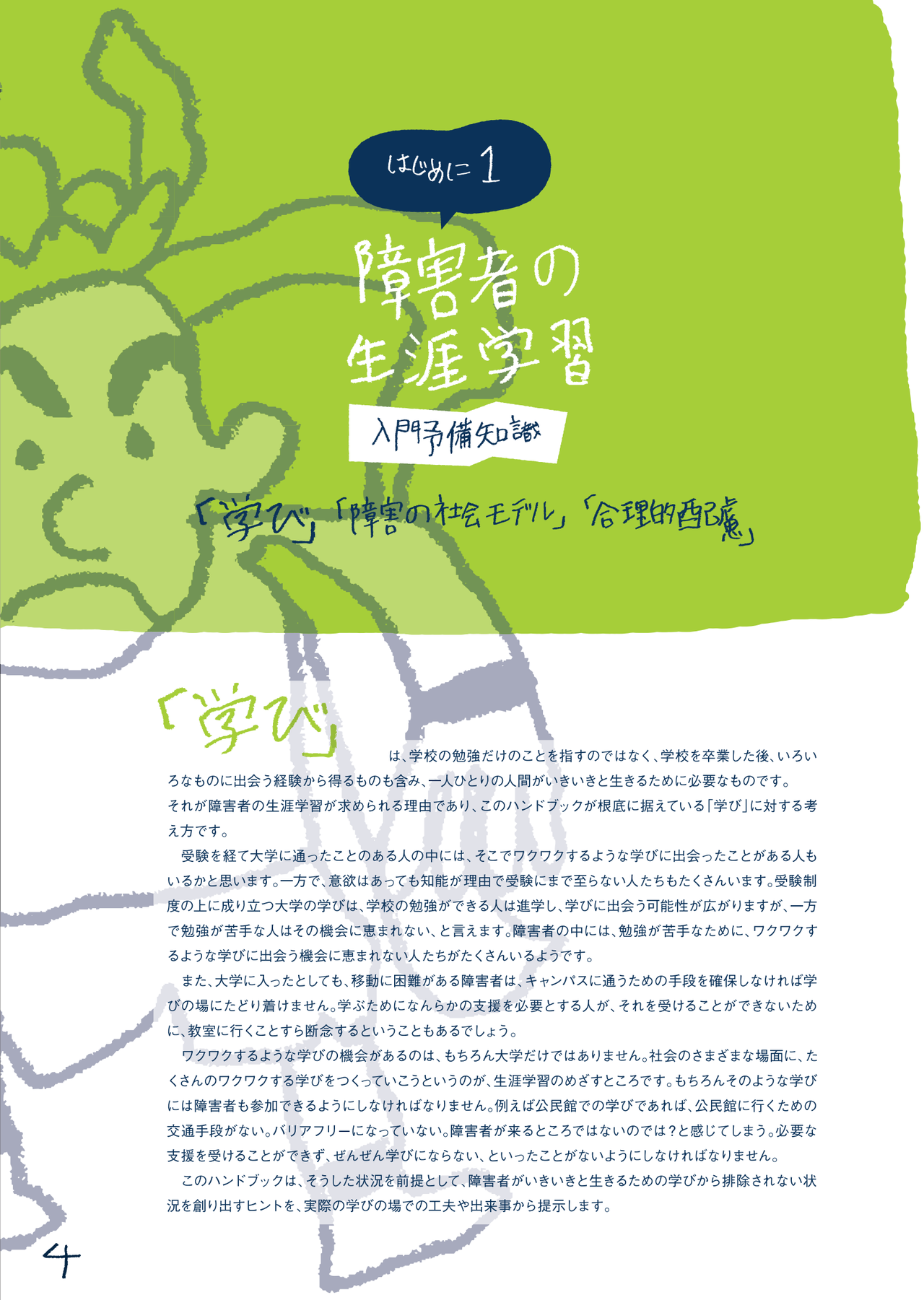

はじめに1

障害者の生涯学習

入門予備知識

「学び」「障害の社会モデル」「合理的配慮」

「学び」

は、学校の勉強だけのことを指すのではなく、学校を卒業した後、いろいろなものに出会う経験から得るものも含み、一人ひとりの人間がいきいきと生きるために必要なものです。それが障害者の生涯学習が求められる理由であり、このハンドブックが根底に据えている「学び」に対する考え方です。

受験を経て大学に通ったことのある人の中には、そこでワクワクするような学びに出会ったことがある人もいるかと思います。一方で、意欲はあっても知能が理由で受験にまで至らない人たちもたくさんいます。受験制度の上に成り立つ大学の学びは、学校の勉強ができる人は進学し、学びに出会う可能性が広がりますが、一方で勉強が苦手な人はその機会に恵まれない、と言えます。障害者の中には、勉強が苦手なために、ワクワクするような学びに出会う機会に恵まれない人たちがたくさんいるようです。

また、大学に入ったとしても、移動に困難がある障害者は、キャンパスに通うための手段を確保しなければ学びの場にたどり着けません。学ぶためになんらかの支援を必要とする人が、それを受けることができないために、教室に行くことすら断念するということもあるでしょう。

ワクワクするような学びの機会があるのは、もちろん大学だけではありません。社会のさまざまな場面に、たくさんのワクワクする学びをつくっていこうというのが、生涯学習のめざすところです。もちろんそのような学びには障害者も参加できるようにしなければなりません。例えば公民館での学びであれば、公民館に行くための交通手段がない。バリアフリーになっていない。障害者が来るところではないのでは？と感じてしまう。必要な支援を受けることができず、ぜんぜん学びにならない、といったことがないようにしなければなりません。

このハンドブックは、そうした状況を前提として、障害者がいきいきと生きるための学びから排除されない状況を創り出すヒントを、実際の学びの場での工夫や出来事から提示します。

「障害の社会モデル」

が世界の常識になってきています。

国連で2006年に障害者権利条約が採択され、日本も2014年にこれを批准しました。障害者権利条約の基本的な考え方が「障害の社会モデル」です。つまり、障害者を排除しない社会をつくっていこう、ということが日本も含めた世界の取り組みになっているのです。

そのベースには二通りの異なる障害の捉え方が関係しています。

ひとつは、障害者は脳を含めた身体のどこかがうまく機能しない人たちなのだから、参加できなくても仕方ない。がんばって身体が動くようにしてから参加すべきだ、という「障害の個人モデル」と呼ばれる見方です。つまり、障害は障害をもつ個人の悲劇だ！という観点です。

そして、もうひとつが「障害の社会モデル」と呼ばれるもので、障害は社会が障害者を排除するという問題だ！と考えます。つまり、社会の方が変わらなければならないという見方で、このハンドブックもこちらの観点に立っています。

「合理的配慮」

は、障害者が参加できるようにするための様々な工夫のことを指す言葉です。段差のある場所にスロープを設置する、情報の保障のために文字、手話、点字を使う、パニックになった人が落ち着けるスペースを設けるなど、いろいろなものがあります。

不特定数の障害者への合理的配慮

さまざまな障害者に対して、参加の障壁をなるべく低くしておく必要があります。段差のために公民館の入口にたどり着けないというような事態は、実際に車いすを使う学習者がやって来る前に解消しておきたいですよね。

一人ひとりの学習者に寄り添う合理的配慮

学びに参加できなくしている障壁は、人によって違います。同じ聴覚障害をもっている人でも、手話通訳で学びがうまくいく人もいれば、手話はわからないので要約筆記が必要という人もいます。それぞれの声を聞かないと、判断できないこともたくさんあるわけです。

知的障害者向け、聴覚障害者向けといったように、障害別に学びの機会をつくるのも、合理的配慮のひとつであることがあります。似たニーズをもっている仲間と一緒に学ぶことで、困ったことも相談しやすいし、関心が共通している可能性もあり、気兼ねなく参加できることもあるからです。

しかし、障害者だけを対象にした学びの機会は障害者だけの閉じたコミュニティで終わってしまうこともあります。社会の一員として障害者がいきいきと生きることに向かう、開かれた学びの場をつくっていきたいところです。

「障害の社会モデル」

NMNMNMN

いろいろな立場の人が協働して学びを拓く PandA-Jの取り組み

NPO法人 PandA-J

職場の仲間　「おまえさあ、もっとちゃんと仕事しろよ。」
けんちゃん　「ちゃんとやってるよ。」
職場の仲間　「それでちゃんとやってるって言えるのかよ。いっつも遅れるし、間違いだって多
けんちゃん　　いじゃないか。自覚をもてよ。」
　　「そんなこといったって…」

「職場での会話」と題して行われた学習の一場面です。知的障害のある２人の学習者が、実体験に即して作られた台本に沿って演技をしていました。けんちゃんは、一生懸命仕事をしているのに、仲間から「ちゃんとやっていない」「さぼっている」と指摘されます。この寸劇のあとで、けんちゃんはいったいどうしたらいいのか、ということについて、学習者たちが意見交換をしました。

いろいろな話が出てきた後、仕事仲間との関係で嫌な思いをしたときは、信頼できる人に相談するのがいいよね、という話に落ち着いていきました。

Aさん　「けんちゃんは嫌な思いをしているけど、言い返したらけんかになって、もっと嫌な気持
Bさん　　ちになりそう。」
Cさん　「私にも、同じような経験があります。一緒に働いている仲間なのに、どうしてもわかってもらえなくて、とても辛かった。」
　　「障害者だからどうせできないんでしょ、って言われたことがあります。すごく落ち込みました。」

あなたはどうしますか？

「私」を磨く本人講座 ～自分で自分を守るための学習～

上の対話は、特定非営利活動法人PandA-Jが実施するセルフアドボカシーの取り組みのひとこまです。セルフアドボカシーというのは、自分の権利を自分自身で擁護するという意味です。知的障害者の権利を支援者が擁護する場合が多い中、自分自身で権利を主張し守る力を身につけ、自分の人生を納得して歩めるようにしようという運動です。
自分自身の権利を主張できないと、不審者に間違えられたり、犯罪者にされたり、トラブに巻き込まれても何もできないということもあります。“トラブルや人生の岐路に立っても、自分でグッドウェイを選択し、意思決定していける「私」を磨く本人講座”というコンセプトが、PandA-Jの取り組みの特徴を表しています。

「生きづらさを感じている知的障害・発達障害のある人の支援」を
自立支援協議会など地域ベース&多職種連携ベースで進めていくために

地域TSでのプログラム展開

知的障害者が権利を自分で守るためには、状況を的確に把握し、適切な行動をとるための学習活動が欠かせません。その際「これをしてはいけません」「こうしなさい」という「教え込む」方法は効果がないばかりか有害です。そういうアプローチは「そんなこと聞きたくない」「知らない」といった拒否・思考停止や、「わからないけど同調しておけば問題にならない」という黙従・迎合などの反応を引き出してしまうからです。

この学習のために必要なことは、「安心して自分の思ったことが言える」「自分のありのままが認められる」という守られた環境と、主体的な考察や働きかけが引き出され「自分の意見や行動が他の人の役に立つ」という自己効力感が得られる機会です。

PandA-Jでは、知的障害者が行動選択の「分かれ道」に立った時、「3人の悪者」のそそのかしと「3人の賢者」の助言について考えるように促し、「分かれ道」にいる自分の分身にアドバイスするという形で学びを深める工夫をしました。行動の選択肢をもつということと、その選択肢の中から自分で選びとるということが大切だからです。

専門家ネットワークで人間関係の学びを支える

PandA-Jの取り組みは、様々な人間関係のトラブルに巻き込まれてしまうリスクのある知的・発達障害のある人を対象にしたものです。

中でも他人を傷つけてしまうリスクのある人たちは、自分と他者との関係性に困難を抱えています。そこに共通しているのは「同意なき境界侵犯」という、相手の同意なく相手の領域に踏み込んで勝手なふるまいをすることですが、人との関係から学ぶことが効果的です。

そこでPandA-Jでは、「トラブルシューター・ネットワーク」という信頼できる人たちのネットワークによって、その学びを支えていくことにしました。トラブル・シューター・ネットワークは、現在のところ、全国に20カ所以上組織され、社会福祉士、特別支援学校教師、矯正教育施設専門官、弁護士、保健師など、いろいろな専門家がボランタリーに集まって相談・支援を行っています。

すべてのまちにネットワークを

「トラブル・シューター・ネットワーク」がすべての自治体に置かれるようになるにはまだ時間が必要そうです。しかし、まったく同じでなくても、自立支援協議会のような、信頼できる人たちのネットワークはあるはずです。

兵庫県のある自治体では、知的障害者が自立支援協議会の正式なメンバーになるための模索を始めています。名簿に名前を連ねるだけではなく、会議の中で意味のある発言をすることは簡単ではありません。そのためには、協議事項について予め学び、自分の意見をもてるようにしておかなければなりません。そこで、自立支援協議会に参画する知的障害者を支える集団づくりをしていけないか、社会福祉協議会を中心に検討を始めました。

COMMENT

○○○